京都大学大学院文学研究科 21 世紀 COE プログラム
「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」
31 研究会

ユーラシア古語文献の文献学的研究

NEWSLETTER

No. 3　2003/10/30

目　　次

活動報告
研究会報告の要旨
次回研究会の開催について
新規加入研究会メンバー
編集後記

活　動　報　告

第 5 回、第 6 回、第 7 回研究会が開催されました。

◆第 5 回研究会◆

日時　2003 年 7 月 5 日（土）　午後 2 時～
場所　京都大学文学部　羽田記念館

「『過ぎし年月の物語』における聖書からの引用」
佐藤　昭裕　（京都大学大学院文学研究科教授）

◆第 6 回研究会◆

日時　2003 年 7 月 12　日（土）　午後 3 時～
（京都大学言語学懇話会第 62 回例会と共催）
場所　京大会館　102 号室

「中期チュルク語における語順
－散文文体の成立という観点から－」
菅原　睦　（東京外国語大学外国語学部助教授）

◆第 7 回研究会◆

日時　2003 年 9 月 19 日（金）　午後 3 時～
場所　京都大学文学部　新館第 4 講義室

「The Old Turkish Texts of the Berlin Turfan Collection」
S.ラシュマン（Simone-Christiane Raschmann）
（ゲッティンゲン科学アカデミー
ドイツ所蔵東方古文献統合目録部門）

研究会報告の要旨

◆第5回研究会◆

『過ぎし年月の物語』における聖書からの引用

佐藤昭裕

1. はじめに

12 世紀初めにキエフで成立した年代記『過ぎし年月の物語』を読むと、当時のロシア（ルシ）の人々の持っていた聖書の知識に驚かされる。そこでは、歴史上の様々な事件が年ごとの記録として記され、節目節目の出来事に際しては、事件の具体的な記述に続いて年代記作者によるキリスト教的立場からのコメントが行われ、その中で聖書の適切な箇所が引用される。本報告では、年代記におけるこのような聖書の引用について観察し、考えてみたい。

2. 聖書本文を参照しながら引用した

まず、年代記中に引用された聖書テクストが、そのギリシア語原典、すなわち『70 人訳聖書』と『新約聖書』、また古教会スラブ語訳の福音書や詩篇に対して、どの程度忠実であるかを見る。「福音書」「使徒書簡」「詩篇」「その他の旧約」に分け、語と語の対応、語順、文法範疇といった特徴について調べると、いずれの場合も、ギリシア語原典および古教会スラブ語訳の本文と細かい点にいたるまで一致したテクストが年代記中に現れていることが確認できる。このことは、引用に当たって年代記作者が、聖書本文、おそらくそのスラブ語訳を手許において作業していたことを示している。

3. 引用に際しての省略

しかし一方で、必ずしもつねに一つの文脈全体が引用されたわけでないこと、むしろその一部が引用された場合の方が多いことが観察される。ひとつの節の前半が省略された場合、中間が省略された場合、後半が省略された場合がある。残された部分、すなわち実際に引用された部分はギリシア語原典の極めて忠実な翻訳である。その部分を巧みにつなげ、それが最初から聖書本文にあったと言われても気づかないほどに、完全に文意の通った「新しい」テクストが作られることもある。

また、かなり離れたテクスト部分が接合され、一つの連続した部分から引用されたかのように見えることもある。さらには、「ルカ」と「マタイ」といった共観福音書の並行する箇所から引用し、あたかも一つの福音書から取られたかのように見える場合もある。

4. 読み手に訴えかけるための手法

年代記作者たちは自らの主張を裏付けるためにもっともふさわしい聖書の箇所を見つけるのに必要な知識を持っていた。さらに彼らは、読み手（あるいは聞き手）としてのルシの人々により強く訴えかけるため、あるいはその

理解を助けるため、ある程度自由に聖書テクストを改変することもした。

その一つは、名詞や動詞の人称や数を変え、聖書に述べられた出来事や預言の内容を、人々により身近なものと感じさせる技術である。ギリシア語原典中で 3 人称で言及されていた神が、引用に際して 2 人称で言及されることにより、ルシの人々により身近な存在となった。あるいは、3 人称で言及されていた、神に対する人間を 1 人称「我々」で指すことにより、聖書に描かれた出来事はルシの人々にとっても他人ごとでなく自らの問題となった。

さらに原テクストでは、連続しない箇所に同一の指示対象が現れる場合、異なる人称や数で言及されることがあるが、引用に際しては、これを一つの人称や数に統一し、整合的な文脈を作るための改変が行われることもあった。

また原テクストで代名詞が使用されている場合、これを周囲の文脈から切り離して引用すると、指示対象が分からなくなる。そのような場合、代名詞を名詞に直すこともあった。

5. 比喩的な表現としての引用

聖書の言葉は、人々に対する「教え」としてだけでなく、気の利いた比喩的表現として使用されることもあった。そのためには人々が日頃から聖書に親しみ、聖書にそのような表現があることを知っていることが前提となる。すなわち、年代記作者としての僧たちだけでなく、読み手としての一般市民、世俗の人々も聖書を良く知っていたことになる。

6. 一般人の聖書についての知識

そのような世俗の人々の代表として、「モノマフの教訓」を残したことで知られる大公ヴラヂミル・モノマフがあげられる。その「教訓」には、詩篇を中心に彼が好んだ聖書の言葉が多く引用されている。そして年代記の本文中でも、彼が日頃から聖書に親しみ、その章句を暗唱し、日常生活の中で自由に引用できたことが鮮やかに示されている。1103 年の記事で、「ポロフツィとの戦い」に勝った彼が「詩篇」を引き、その際『70 人訳』原文の λαοῖς τοῖς Αἰθίοψιν「エチオピアの民」（73.14）> Ps.Sin. ljudemъ etiopьskomъ を状況に合わせて ljudem Rusьskym「ルシの民」に変えて引用した場面がそれである。モノマフもまた聖書の行文を自由に引用し、かつ状況に応じて即妙に改変する能力を持っていたことになる。

7. おわりに

以上、ルシの年代記作者たちが、聖書本文を参照しつつ引用の作業を行った一方で、実際の引用に当たっては、その語句を一字一句違えずそのまま引用するのではなく、自らの必要に応じて、自由に本文を改変していたことを見た。モノマフをはじめとする市民たちが聖書に親しみ、その内容に通じていたことも分かった。詳細は筆者の論文 “Цитаты из Библии в «Повести временных лет.” *Comparative Studies in Slavic Languages and Literatures: Japanese Contributions to the 13th International Congress of Slavists.* Tokyo. 2003. pp.5-38.を参照されたい。

◆第 6 回研究会◆

「中期チュルク語における語順
　－散文文体の成立という観点から－」

菅原　睦

トルコ語をはじめとするチュルク諸語は、類型論上 SOV、Modifier - Head の基本語順をもつ言語として知られるが、実際の発話においてはしばしばこの基本語順からの逸脱が見られる。トルコ語の語順に関する近年の研究は、このような語順のヴァリアントを、口語特に‘unplanned speech’に特徴的な現象として位置づけ、談話的な要因からの説明を試みている。

一方チュルク諸語の歴史を見るならば、漢語、ラテン語、アラビア語といった言語からの翻訳に際して、原文の語順をそのまま保持した、それゆえチュルク語としては特異な語順をもつ文献が残されていることが注目される。

本発表は、談話的に条件付けられる口語的な語順と、翻訳に由来する外来構文という２つの要素が、１４－１５世紀の中央アジアチュルク語散文文献においてどのように現れているかを検討することにより、この時代のチュルク語散文文体の成立・発展過程の一面を描き出そうとしたものである。

まずいわゆるホラズム・トルコ語による散文作品『預言者たちの物語』（ラブグーズィー、１３１０年)、『天国への道』（１３５０年頃)、『昇天の書』（１４３６／３７年筆写）の語順を分析し、上で触れた現代トルコ語口語の語順と類似した傾向が認められることを示した。具体的には、前提となっている要素の後置（例(1)）や補足的な修飾要素の後置（例(5)）といった現象である。

(1) ol oġlan tuġdï ärsä atïn Hāris atadï Hawwā.
「その息子が生まれるとその名をハーリスと名付けた　ハッワーは。」

(5) tišlärindin nūr balqïnur erdi kün nūrï mängizlig.
「（アーダムの）歯から光が輝いていた　日の光に似た。」

このことから、ホラズム・トルコ語散文作品の言語が、語順に関してある程度まで当時の口語の特徴を反映していると考えることができる。このことは同時に、この言語が文章語の発展の初期の段階にあったことを示すものでもある。

これに対して、１５世紀後半のチャガタイ語散文作品においては、上のような口語的な語順よりもむしろペルシア語構文のなぞりがしばしば目に付く（例(20)）。

(20) ġaraz bu maqālātdïn wa maqsūd bu ‘arz-i hālātdïn bu erdi kim …
「この論説の目的およびこの著述の意図は以下のようであった…」
（目的－この論説から－および－意図－この著述から－…）

さらに押韻散文のように、文体上の目的のために特定の語順が選択されている例も見出される（例(22)）。

(22) har ni‘mat kim sanga berip tur wa sening dekkä bermäy dur xudāwand mawhibat-ē dur hamd u sanā ayturġa kirāmand.

「神がお前に与え、またお前のような（他の）者に与えていないすべての恵みは称賛と賛辞を言うべき貴い恩寵である。」

（すべての恵み－rel.－お前に与えている－また－お前のような者に与えていない－神が－恩寵である－称賛と賛辞を言うべき－貴い）

このように、外来構文の影響を強く受けた独自の文体を備えるに至ったことが、古典時代（１５世紀後半）チャガタイ語散文の重要な特徴のひとつであると言うことができる。

発表ではさらに、ともにペルシア語からの翻訳による２つの散文作品『友愛のそよ風』（ナヴァーイー、１４９５／９６年。　原作はジャーミー『親交の息吹』）と『聖者列伝』（訳者不明、１４３６／３７年筆写。原作はアッタール『聖者列伝』）の文体を比較した。神秘主義者の評伝という同じジャンルに属するこれら両作品の比較は、翻訳と散文文体の確立との関係を考えるための重要な手がかりを提供するものであることを指摘した。

✏ なお、第 7 回研究会報告の要旨は次号に掲載いたします。

第 8 回研究会の開催について

下記のとおり第 8 回研究会を開催いたします。皆様のご参加をお待ちしています。

COE 第 8 回研究会　　（第 51 回羽田記念館講演会と共催）

日時:2003 年 11 月 15 日（土）　午後 2 時～
場所:京都大学文学部　羽田記念館

「中央アジアにおけるシャマニズム・スーフィズム・イスラムの交差」（英語）
ティエリ・ザルコヌ　　フランス科学研究院　研究員

「18 世紀のモンゴル歴史家ゴンボジャブ（工布査布）による
モンゴル古代史」（英語）
ウラジミール・ウスペンスキー　ロシア科学アカデミー東方学
研究所　サンクト・ペテルブルグ支所　上級研究員

✉　研究会案内の電子メールによる配信をご希望の方は研究会事務局までお申し出ください。

新規加入研究会メンバーについて

当研究会では、下記 10 名の若手研究者を新規メンバーとして迎えました。これにより、今後いっそう研究会活動を活発化していきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

新規研究会メンバー紹介　（五十音順）

- 伊藤隆郎（いとう　たかお）　京都大学大学院文学研究科研修員
  西南アジア史学（マルムーク朝史）
- 越智サユリ（おち　さゆり）　京都大学大学院文学研究科博士後期課程
  言語学（モンゴル語）
- 川澄哲也（かわすみ　てつや）　京都大学大学院文学研究科博士後期課程
  言語学（中国語）
- シモン・グジェラック（Szymon Grzelak）京都大学大学院文学研究科博士後期課程
  スラブ語学スラブ文学（日本語，スラブ語）
- 白井聡子（しらい　さとこ）　京都大学大学院文学研究科専任講師
  言語学（チベット=ビルマ語）
- 楢崎勝則（ならざき　かつのり）　京都大学留学生センター非常勤講師
  言語学（シリア語）
- 濱本真実（はまもと　まみ）　京都大学大学院文学研究科研修員
  西南アジア史学（前近代ロシアにおけるムスリム）

- 森若葉（もり　わかは）　京都大学大学院文学研究科研修員
  言語学（シュメール語）
- 矢島洋一（やじま　よういち）　日本学術振興会特別研究員
  西南アジア史学（スーフィズム史）
- 和田郁子（わだ　いくこ）　京都大学大学院文学研究科研修員
  西南アジア史学（前近代のインド・イスラーム政権とインド洋）

編集後記

COE31 研究会ニューズレター第 3 号をお届けいたします。新規加入研究会メンバーを迎え、当研究会の構成メンバーは総勢 39 名になりました。今後も活発に研究会等を企画して参りますので，皆様のご支援，ご協力をお願いいたします。

連 絡 先

「ユーラシア古語文献の文献学的研究」研究会
〒606-8501　京都市左京区吉田本町　京都大学大学院文学研究科言語学研究室（大崎）
Tel : 075-753-2862　Fax: 075-753-2827
E-mail: eurasia-hmn@bun.kyoto-u.ac.jp
Web page: http://www.hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/eurasia/